

大谷學報

第十一卷 第一號

淨土莊嚴の原理

曾 我 量 深

この題目は勿論自分としては眞宗學の一つの重要な問題であるとして茲に掲げましたのであります。けれども一體こんな問題を論ずるといふことはそれは眞宗學の範圍であるか、又眞宗學といふものを超えた事柄であるか、色々の議論もあることであらうと思ふのであります。併しこの淨土莊嚴の問題に就きましては根本は無論大乘佛教全般に通じて掲げられてある所の事柄でありますけれども、將に淨土教の聖典であります三部經、殊に『大無量壽經』の中にこの淨土莊嚴の因源果海といひます因の源、果の海を盡して説述されて居るのでございます。併しこの『大無量壽經』に記されてあります所は恰も昔話といつては悪いのですけれども、昔話のやうな相を以て一つの敘事詩といふ形を以て記されて居るのであります。所が印度の天親菩薩―即ち法然聖人が淨土教の正依の經典

としまして三經一論——淨土三部經及び一つの論があります。其三經一論と言はれる一論といふのは何であるか、即ち天親菩薩の『淨土論』であります。或は之を『無量壽經優婆提舍願生偈』と名付けるのであります。其淨土論即ち無量壽經優婆提舍願生偈と名付けられる一つの論の中に、淨土莊嚴の問題に就きまして非常に深い意義を論議してあるのでございます。無量壽經の優婆提舍、といふのは論議であります——無量壽經の深い意義をば論議問答する——それを論議するといふに當りまして、唯徒らにそれに論議するといふことではなくて其論議するに就いて、論議するに先立つて願生偈といふ一つの韻文、言はゞ詩であります、所謂宗教論理詩ともいふべき、或は宗教自覺詩ともいふべきものでありませう、其宗教論理的韻文とでもいふべき願生偈といふ往生を願ふ心の偈文、二十四行の偈文といふものを掲げてあるのであります。さうして其二十四行の偈文の中に彰はされて居る所の意味——其二十四行の偈文の中に前提せらるべき所の先驗的意義——それを偈頌暗含の義といふ、其暗含の意義といふものを打ち出しましたのが解義文と申し即ち義を解す——偈文の中に含まれて居る所の意義を解釋する所の第二の論文を茲に附説してあるのであります。だからして淨土論と申しますけれども其の論の主體、論の本體となるものはこの二十四行の韻文讃歌といひますか、さういふ一つの宗教論理的韻文、それが淨土論——無量壽經優婆提舍の主體となるべきものであります。だから無量壽經優婆提舍願生偈、斯ういふ工合に論主自ら名付けられたものであらうと思ふの

であります。

でこの大無量壽經といふものを見ればそれが如何にも平面的、所謂平面描寫の物語を記してあるやうであります。併し其を物語つて居るそのものは何であるか、物語つて居る所の其教主自身は何であるか、又物語らうとするものと物語られて居る事柄とどう關係して居るのであるかといふやうなことは、大無量壽經の上には更に見えないのであります。がそれが淨土論即ち天親菩薩の優婆提舍願生偈といふものになりますといふと、それを物語つて居る法藏菩薩といふ因位の菩薩が五劫の思惟をして四十八大願といふものを選択攝取して、さうして不可思議兆載永劫の間に其本願を本願の如く修行しまして、さうして其本願が成就せられ即ち衆生を救ふべき所の本願が成就せられて、其本願成就の故に自ら盡十方無碍光如來といふ證りを開かれて、さうして西方十萬億土に於て極樂淨土といふものを莊嚴された、即ち極樂淨土といふものゝ莊嚴が成就したそれに依つて我々衆生といふものゝ救済が成就したのであります。斯ういふのが大無量壽經上下二卷の大意であります。就上卷は如來淨土の因果を説き、如來が淨土を莊嚴せられるに就いての原因と結果とを説き、又下卷は我々衆生が往生し救はれるべき所の原因と結果とを説き明してあるのであります。上卷の初め半分は如來淨土の原因を説き後半分は如來淨土の結果を説き、又大無量壽經下卷の初めの半分は衆生往生の原因を説き、眞實原因に就いて論證しまして、特に第十八願成就といふものを明らかにし

てあります。第十八願成就といふものは特別に衆生往生の直接なる自證の眞實原因といふものを明らかにしたのであります。特に淨土往生の原因といふものを明らかにするのが下卷の初めの半分といふよりも、殆ど大部分であります。又下卷の後の半分は淨土往生の衆生に就いての胎生化生が出て来る。眞實の淨土往生といふのと方便の淨土往生といふのがある、まことの淨土と假りの淨土といふものがある、斯ういふ工合に所謂淨土往生の結果に就きまして眞實と方便といふものを分判して、批判決定したものが即ち後の半分であるが故にそれは淨土往生の果といふものに就いて論ずる所の一段であります。斯ういふ工合に申すことが出来ると思ふのであります。

兎に角其大無量壽經のことに就きまして詳しく申すのは今日の目的でありませんから之は略しておきます。今皆様にお話しようと思ふこの大無量壽經の極樂莊嚴、具さに淨土莊嚴の目的、淨土莊嚴の原因、淨土莊嚴の結果、淨土莊嚴の目的の成就、それを叙述してあります所の其大無量壽經の淨土莊嚴の原理を明らかにするといふのが、それがこの無量壽經優婆塞含願生偈の一巻である。極めて簡単な分量的に言へば殆んど言ふに足らん所の極く簡単な一冊子であります。けれどもそれは淨土の因源果海といふものゝ全體の原理を盡して居るのがこの淨土論一卷であります。斯ういふ工合に言はなければならんことだと思ひます。

さうしてみると既に極樂莊嚴即ち淨土莊嚴といふことはどういふ意義を有つて居るか、其淨土莊

嚴の意義といふものを明らかにして居る所の聖典といふものが既にあるのであります。然らば其聖典の研究をし、其聖典の精神を明らかにするといふことは即ち淨土莊嚴の原理を明らかにするといふことであらうと思はれる。斯ういふ工合に考へるならば、茲に掲げました所のこの題目といふものを眞宗學に於て論ずるといふことは必ずしも不當では無いであらうと自分は考へて居ります。嘗にそれが不當でないのみならず之は淨土敎の成立といふものに就きましてこの問題を解かずんば淨土敎といふものは成立しなくなる、此問題を論じないならば淨土敎といふものを論すべき何も無いのであります。之が淨土敎の總てであります。斯ういふ工合に言つても敢へて過言では無からうかと自分は思ふのであります。従つて斯の如き重大な問題を輕々しく論じ去るといふことは、それはまことに烏辭がましいことと思ひますけれども、此席を借りましてお話しやうと思ふのであります。今日は學術講演會であります。學術とはどういふことであるか、私は知らないのでありますが斯ういふことでも話をするならば、それが學術といふものであるならば僥倖でせう。それが學術でないといふ云へば無くても差支へないと思ひます。まあ兎も角自分が自分の信する所といひますか、考へて居る所といひますか、自分では考へるといふことゝ信するといふことゝは區別が分らない、どういふ區別を有つて居るのであるか自分には分らない、だからしてまあさういふことが分けられるものか分けられぬものかそれは分らぬけれども、兎も角自分としては分けることは出來ぬ、又分ける

必要も認めません。ですから之は研究であるか、又唯自分の空想であるか、之が信仰といふのであるか何であるか自分は知りませんが、まあさういふやうなことをごつちやにしまして自分の想ひを思ひ出す儘に無秩序にこのお話を少しばかり致してみたいと思ふのであります。

この天親菩薩の『優婆提舍願生偈』所謂二十四行の偈文が

世尊よ我一心に盡十方の無碍光如來に歸命して、安樂國に生れんと願す、我は修多羅眞實功德相に依つて願偈を説いて總持して佛教に相應せしむ、彼の世界の相を觀するに三界の道を勝過し究竟して虛空の如し。廣大にして邊際なし、正道の大慈悲は出世の善根よりして生ず、淨光明満足して鏡日月輪の如し、諸の珍寶性を備へ妙莊嚴を具足し、無垢光炎熾明淨にして世間を曜らす。

斯ういふやうに段々進みまして二十九種の莊嚴、二十九通りの莊嚴といふものをば茲に掲げてあるのであります。所が大無量壽經では唯この法藏菩薩の因位の修行、阿彌陀如來の極樂淨土の有様と衆生救濟の有様と、即ち如來と衆生とを對立して、さういふものを散文的に説かれてある。其散文的に説かれてある所の大無量壽經の精神を擲んで其精神を一つの韻文として現した即ち其精神を佛凡無碍の一心に綜合して現した大無量壽經を綜合して現すに就いては特に韻文として現さんければなりません。斯ういふところに我々深い注意を要することだと思ふのであります。此淨土論を

註釋した婆藪槃頭——天親菩薩、菩薩といつても人間でありまして何も何所かに妙なものがあるといふのでもなく、法藏菩薩といふ人間は居らぬけれども俺は天親菩薩だと名乗つたか、他人が云つたのであるかそれは分らぬけれども婆藪槃頭は居つたに違ひない。菩薩といふ名は誰れが付けたのか知らん、俺は菩薩だと名乗りをあげたかそれは知らぬが俺は天親だと名乗りをあげた人は確かに居つた、それが淨土論の著者であります。つまり淨土教の教相、教へのすがたといふものはこの如來と衆生、淨土と穢土との對立的立場に立つ所の大無量壽經に盡きて居る。つまり淨土教の教へ方、眞實の宗教の道の教へ方といふものは大無量壽經で一通り盡きて居るであらうと思ふけれども、其教への根本へ遡つた其教へといふものに表現する所の教の本質、其自證的原理其ものを明らかに知り、其ものに觸れて其教へをどう受け取るかと云ふこと、詰り教へを受け取るといふことは其教へといふものに現るゝ原理、教への中に教へを超えて本當の教へ其ものゝ本質たる所の原理其ものをつかむ、其ものを掴むといふことそれが教へを受け取るといふことである。教へを通して其教へを超えて其教への中にあつて而も其教へを超えたる所の其精神といふものを掴むといふこと、それが教へをうけとるといふことであります。其教への本質を證入し、其教への本質を掴む所の方法、それを正に教へ方に對する安心領受と申すのであります。教へに表現されたる所の教への原理に觸れて居る其教へを一層内面化することで、教への依つて立つ其原を掴むことであります。それが教へを離れて

摺むことは出来ない。必ず徹頭徹尾敎へを通して其敎への内にあつて而も其敎へを超えた所の、本當の敎への本質といふものがそこに初めて其敎への根本を摺む、それが安心といふのであります。其敎へといふものゝ根本に開入する所の安心といふものに依つて其敎への原理といふものに觸れて、其敎への原理といものを明らかにして來る。其明らかにして來る所の一つの行爲、其行爲が優婆提舍願生偈といふ二十四行の偈文である。斯ういふ工合に考へられるのであらうと私は思ふのであります。

如何にもこの淨土の莊嚴といへば只金銀七寶の耀きがあつて、そこに百味の飲食を食べてさうして白鵠・孔雀・鸚鵡・舍利の音樂でも聞いて、さうして浮世の悩みを忘れるといふこと、それがお淨土參りをするものである。我々がお淨土と言へば昔からさういふ工合に考へられて來たものであるし、又現在もさういふやうに内にも外にも考へられて居るのであるが、今後もさういふやうに一般の人に何時迄も考へつけられることであると思ふのであります。さういふ風に考へる考へが悪いといふ譯はない。さういふ風に考へるといふことも淨土の一つの意義であらうと思ひます。徒らに迷信であるとしてそれを排斥する必要もなく、たとひそれが迷信であつても其迷信を迷信として排斥せず、其迷信の依つて生ずる所の根本の要求其ものを明らかにしていつて必ず其迷信といふものを淨化して、正しい所の信念にせんければいけないといふ、それが即ち眞の宗教の特別の本質的使命であらうと思はれる。だからさういふ外的なる偶像破壊とかいふやうなことは我々淨土教徒のなすべき

事柄でないと思ひますが、只我々が淨土と云へば單にさういふことだ、單に金銀七寶といふことだけが淨土である、其他に淨土といふものは全くないものだ、斯ういふ工合に考へるならば、それは少し間違つた考へであらうと思ひます。大無量壽經や觀無量壽經の或る一部だけを見ればさういふやうに見えないことも無い、けれども少しくこの淨土論、それは大無量壽經の原理といふものを擲んで、其全體を擲んで已證の安心、即ち大無量壽經を自分自身の自覺の上に求めて、則ち無限の反省、無限の否定自覺といふものに自分自身が依つて立つ所の其根本の宗教的覺體、宗教的原理といふものに統一せられ、さうして示す所の淨土論二十九種莊嚴といふものを私共が見て來るならば、大無量壽經に掲げられて居る所の淨土莊嚴といふものはどういふものであるかといふことを明らかにすることが出來るであらうと思ふのであります。けれども私は今自分自身さういふことを明らかにする力があるといふのではなくて、唯自分はこの願生偈といふ小さい二十四行の偈文といふものが之を明らかにして居るものであるといふことだけを、この講演に於て諸君に暫らく御紹介申せばこの講演の目的は達せられるものであると思ふのであります。

さてこの淨土論といふものを見ると初めに世親は世尊と教主釋尊の名を呼んで居ります。それは自分の述べんとする所の、自分の安心といふものは之は教主世尊の教へ、教主世尊の發遣といふものを仰ぐ他何物でも無い。この傳統の教へ、傳習の教へといふものを仰ぐ其他に何ものも無い傳統

の古い教へ、極めて古くさい所のといつては悪いけれども、古く變らない所の傳統、其傳統の教への中に新しい所の現在の自己といふものを見出す。さうしてそれが所謂一心歸命の信心、盡十方無碍光如來の仰せを頼む、其本願の仰せに縋りそれを頼みそれを信じてさうして彼の安樂淨土に生れむことを自分は願するのである。斯ういふ工合に自己の安心といふものをばこの二十四行の偈文の劈頭に述べてあります。さうしてそこに現れて來る所の一つの問題がある。其問題は即ち願生の問題——淨土往生を願する所の問題であります。淨土往生を願する所の問題と云へば何であるか、願生といふことも一つの迷信でないか、今の言葉で云へば自力の迷信でないか、一體我々が救ひを求め、道を求めるといふことはこの迷ひの生を捨てるといふことが目的である。現實の生を解脱するといふことが目的である。然るに我等が淨土といふものをこの娑婆以外に、この娑婆以上に求めるならば、それは娑婆を捨て、更に新しい所の淨土を願するのである。斯の如くにすれば我等の生死の迷ひといふものは無窮で、窮まる所がない、斯ういふものは迷信といふものであります、一つの循環論證であります。今は詳しく申されんが要するに迷信で、斯ういふ問題は當然提出さるべきものであります。別に淨土論の中には斯ういふ問題を明らかに提出しては居らんけれども、斯ういふ問題が自らそこに提出さるべきものであります。提出さるべき問題であるが明瞭に提出しては居らんけれどもさういふ一つの暗含の義、隠れたる問題がある。願生といふ一つの大きいなる問題、往生といふ一

つの大いなる問題を解釋し、それを解釋するために淨土の二十九種莊嚴といふものを現するのであります。其問題を解決せんとするために二十九種莊嚴といふものがそこに現はされて居るのであります。斯ういふ工合に曇鸞大師といふ人が註釋して論の意義を明らかにして居るのでありますが、それは申す迄もなく『願生偈』の中にすつと國土莊嚴、この二十九種の中に於て先づ十七通りの依報の國土莊嚴、正しく淨土の莊嚴即ち阿彌陀佛の所住であり所依たる國土莊嚴といふものがあります。この十七通りの依報莊嚴といふものを説きまして、更に進んで正報莊嚴即ち佛の莊嚴、更に下つて菩薩の莊嚴——淨土の眷屬——佛のお弟子佛の家來たる所の菩薩の莊嚴が八種、佛の莊嚴四種といふものを述べやうとする其中間、國土莊嚴の次に故我願生彼、かるが故に我れ阿彌陀佛の彼の國に生せんと願す、依報十七通りの莊嚴を述べて此の通りの謂れがある、お淨土には此の通りの價值がある、この通りの意味がある既に述べた所によるといふとこの通りの意味があるのみならず、之から更に述べんとする甚深の意義がある。既に上來述べし所の十七通りの國土莊嚴といふものがあるに依つて、それ故に我はこの阿彌陀佛の彼の國に生れんと願するといふことは極めて合理的なことであります。二十九種莊嚴といふものを結んで故我願生彼阿彌陀佛國と言つてある。即ち願生問題を解決するためにこの二十九種莊嚴の淨土其ものを明らかにする。それが即ち願生の願といふものを明らかにしたのでありませう。願即ちねがひ、淨土願生の願ひの意義を明らかにした其願といふものゝ

内容を明らかにして、さうしてこの願といふものを限りなく内面化したものが即ち二十九種莊嚴、特に正しく國土莊嚴の十七通り詳しく言へば前後に通ずる所の佛莊嚴八通り菩薩莊嚴四通り合せて二十九種莊嚴といふものを現して、それを願することに依つてこの願生の問題といふ一つのたいなる問題は解決が出来るであらう。斯ういふ工合にして淨土莊嚴といふものを詳しく述べられたことであるといふことは疑ふべからざることであります。のみならず又もう一面から考へればひとり淨土教の原理を明らかにする、即ち淨土願生の意義を明らかにする、淨土願生の依つて立つ所の正しい所の原理を明らかにするといふことが、それが一つの二十九種莊嚴といふものを説く所以であるが、それと同時にさういふ原理を明らかにするといふことばかりではなくてそれに依つて我々の往生の信念、實際上の我等の信といふものを成立させてゆくものが即ちこの願に依つて信を生ずる、この淨土の依報正報を詳しく觀察することに依つて始めて信といふものを生ずる、信の原理たる所の願、願は即ち信の原理であるが故に願に依つて信といふものは成立するのであらう。斯ういふ工合に考へられるこの二つの理由に依りまして、この二十九種の莊嚴といふものが觀察されるのであります。天親菩薩の淨土論は斯ういふ工合に見えるといふことを曇鸞大師が明らかにして居るのであります。だから私は所謂眞宗學の對象は何ぞや眞宗學は信といふものゝ原理、信の背景としての願を明らかにするにある。信は願より生ずる、其信を能證する所の所證の一念に至つて證せられた

所の信仰の事實、證せられた所の信仰體驗といふ一の事實に立つ、其事實に依つて成立すべき所の原理たる願といふものを明らかにするにある。この願を明らかにするといふことが信成立の根本である。既に信が成立したといつても願を明らかにしない時は此の信が自力の信となる。信の原理たる所の願を明らかにすることに依つて其信といふものが始めて本當の何時でも新しい、永遠に新しき所の信といふものがそこに成立する。即ち如來廻向の大信心といふものはそこに初めて成立するのであります。信に依つて生ずべき、信といふものを合理化する能證の原理であつて、従つて信をして本當の信たらしめ、信をして迷信たらしめずして正信たらしむべき所の原理たる所の其願を明らかにする。願が穢れて居るならば信が穢れて居る、願が清淨であるならば信が清淨である。信の清淨と不淨とは其背景原理たる所の願の清淨であるか不淨であるかといふこと、願を内觀することに於て初めて信といふものが清淨となり又不淨となるであらう。即ち信が不淨であるといふことはやがて信を清淨にする所以であり。信の清淨なる所を觀する所の所以であります。信を勝手に清淨なものであると決めて居れば其願といふものを内省し反省する所の餘地がありませんさういふ人の信仰を迷信と名付けるのであります。

だから眞宗學の對象は願を學するのであります。眞宗は祈禱のない宗教であるといふ。それ然り豈それ然らんや、眞宗は祈禱のなき宗教ではない、無祈禱の教へではない、祈禱せざる教へ祈禱を要せ

ざる教へである、不祈禱の教へである、祈禱あるが故に祈禱せないのであります。無は是れ有に對する言葉である。だからして無は有といふことに反對するけれども不といふことは必ずしも有に反對するのではない、素より如來の願、如來廻向の本願あるが故に祈禱を要せざるものであります。祈禱が無いのではない。祈禱が本來ないから祈禱する必要もあるではありません。けれども素より如來の大きな祈願祈禱あるが故に、我等凡夫自力の經驗的祈禱を要しない、さういふものは要らぬのであります。それは不祈禱の宗教であつて無祈禱の宗教ではない、斯ういふ工合に言はんければなりません。殊に此頃眞宗教團に於て祈禱問題等をやかましく言つて居るのでありますが、祈禱問題を簡單に批判し決定すれば斯の如くであります。滔々として眞宗を無祈禱の宗教であるといつて困つて居る人がある、困る必要はない、祈禱あるが故に祈禱を要せざるは勿論である。斯う言へば盡きて居る。然らばこの祈禱とは何ぞや、如來の祈禱である、如來が衆生の爲に祈禱せられる祈禱である。即ち信の依つて立つ所の宗教の根本原理たる如來の大願大行たる所の願海、如來の大行とは願である。如來の本願こそは如來の唯一の大行であるが故に、如來の唯一の大行たる如來の本願を明らかにし、如來の本願の眞假を明らかにし、眞實と方便とを明らかにしてゆくといふ、若し内觀といふ言葉がそこに許されるならばさういふことが唯一の内觀で無からうかどさう私は思ふのであります。其如來の本願を離れて何所に宗教的内觀がありませう。又如來の本願をしるといふこと、それが内

観でなくて何でありませうか、斯ういふ工合に言ひたいのであります。それで眞宗學の對象は即ち願である、其願の内容はどうか、其願の内容を明らかにする、其願の内容がつまり淨土の莊嚴といふものであります。淨土の莊嚴はつまり願の内容である。斯ういふ工合に言はんければならんと思ふのであります。詳しく申すことは出来ないけれどもまあさういふ工合に申したいと思ふのであります。

それ故二十九種莊嚴といふものは本願の内容であります。即ち四十八願といふものはつまり本願の内容を明らかにするための四十八願である。願は一つである。一つであるが一つの願が四十八に分かれて居るのは其本願の内容を明らかにする爲に内容が四十八あるのであつて、本願の體そのものが四十八あるといふのではありません。本願の内容に依つて四十八願といふものがそこに發されたのである。斯ういふ工合に言はんければならぬと思ひます。即ち四十八願の内容は淨土を莊嚴するといふことである。さういふことは何所に書いてあるか、お前が勝手にさういふことを言ふのではないか、私は自分勝手なことは一言も言はないつもりであります。それはこの淨土論の偈文が即ち一心歸命の安心といふものを明らかにして、其安心の基づく所の願生といふものを明らかにして、其願の内容といふものを明らかにすることが即ち二十九種莊嚴であります。斯ういふ風に見るのが當り前であります。従つてそれは淨土論の解義文―淨土論の偈文それ自身は天親菩薩自ら解釋して居る所の一つの論文であります。本當の論文はこの偈文でありますが、其偈文を解釋した所の、

第二論文、附屬論文でありますが其中に詳しく觀察の體相、觀察の趣意、觀察の對象、觀察の内容といひますか、趣意になるべき所の二十九種莊嚴といふものを明らかにしまして、其二十九種莊嚴成就、成就とは何ぞや、成就といふことは廻向成就であり、只成就ではない、我等衆生の上に廻向成就されたのであります。我等衆生を離れて成就といふことはない、成就といふことは詳しく廻向成就といふことであります。一體この阿彌陀佛の本願が成就したといふことは何所に證據がある、成就したといふことがちやんとお經に書いてあるからある。成程お經を見れば本願が成就したといふやうには書いてある。書いてあるが實際成就したといふことを何所で探ぐるか、それは成就の文といふものがある。成就の文だといふことは何所で分るか、それはさう書いてあるから、書いてあつたつて教への言葉であつて、教の眼目の言葉は何所にあるか、實際教へといふものは自分の體驗に觸れねばならぬ。其教への成就の文と言はれる眼目は何所にある、斯ういふのであります。之が第十七願成就の文、之が第十一願成就の文、之が第十二願成就の文といふ。成程一應さういふ工合に言へばさうも言はれるけれども實際正に本願が成就した。善導大師は「若我成佛十方衆生、稱我名號下至十聲、若不生者不取正覺、彼佛今現在成佛、當知、本誓重願不虛、衆生稱念必得往生」、「當に知るべし本誓重願虛しからず、衆生稱念すれば必らず往生を得る」本誓重願が成就した虚しからず、其證據が何所にあるか、我が祖師親鸞は一體本願成就といふことは何所にあるか、成就とい

ふことは廻向成就といふことである。我等衆生に廻向成就する、我等衆生に本願力廻向成就するのである。我等衆生に廻向せられるといふこと、其ことを離れて本願が成就するといふことは昔話に過ぎない。それは昔話でも差支へないけれども唯それだけでは少しどうか、ふらく／＼になりはしないかと思ふ。それで親鸞はこの大經下卷の「諸有の衆生其名號を聞いて、信心歡喜せむこと乃至一念せむ、至心に廻向したまへり、彼の國に生せんと願すれば即ち往生を得て不退轉に住せむ」、之が名高い十八願成就の文であるといふことは既に前からして傳へられて居ることである。それが一體成就の文だといふことは何所に證據があるか、親鸞は之を睨まれたのであらう。親鸞はこの「至心廻向」といふ四字を讀んで茲に願成就の證據がある。之を擱んだのです。だからこの讀み方が違ふ。親鸞以外思想的に言へば親鸞以前といふけれどもやはり實際的に言へば親鸞以前も以後もないことで、親鸞以前何ものでも今現在も昔も變りはない。思想的に言へば親鸞以前も現在も親鸞以前である。思想的に親鸞以前の人達は、「諸有の衆生其名號を聞きて信心歡喜し乃し一念に至るまで至心に廻向して彼の國に生れんと願すれば即ち往生を得て不退轉に住せん」、所謂願成就の文といふものを一氣呵成に讀んだ。斯ういふものが何所に差支へがある。何所にも差支へはない。差支へはないけれども本願成就の證據にならぬ。本願成就の證據でなくともよいならばそれで差支へない。本願成就の證據を求めやうとするならば其證據にはならぬ。悲しむべきことです。一體四十八願の他

の願なんか成就しないでもどうでもよい。この四十八願の中の唯一つの第十八願、この王本願一つが成就すればよいことだ。其一つが何所に成就した證據がある、「乃至一念至心に廻向して」本願が成就したる確證がないから我々は今更に至心廻向しなければならぬ。本願が成就しないから自分が一心に廻向して願生する必要がある、所謂自力の祈願祈禱が必要であります。至心に廻向して願生するといふ必要のあるのは如來の本願が廻向成就せざるが爲であつて、如來の本願が廻向成就したといふことが明らかであれば自力の至心廻向して願生する廻向願生といふ必要がなくなる。其必要がなくなつたのは即ち如來の廻向成就したといふこの一つの體驗によつたのであります。親鸞が「至心廻向」の四字を「至心に廻向したまへり」と讀んだ。親鸞は大無量壽經の中に本願が成就したかしかさういふこと一つを求めた。彼は永い間苦勞されたのは如來の本願が如何にも成就したやうに經文を讀んで居るといふと薄ぼんやり見えるが、何だかそれは又成就しないやうにも思はれるし、成就したやうにも書いてある。けれども本當に成就したといふ證據がどうも掴らない。で親鸞は至心廻向の四文字大無量壽經の所謂第十八願成就と言はれる其文字の中にどうでも斯うでも茲に本願成就の證據がなければならぬ。斯う思ふけれどもどうも無い、隠くされて居る、それを發見した、この隠くされてある文字を發見した之を祕密の公開といふ所謂公開の祕密である。總て祕密は公開されて居る祕密が本當の祕密であります。其公開せる祕密を見出した、茲だ至心廻向したまへり、之が本

願成就だ。本願成就とは今迄何のことか分らなかつたけれども本願成就といふことは本願廻向成就である。如來の廻向成就であるといふことを彼は初めて見出したのでありませう。彼斯の如く見出して來ました時に始めて之が成程昔から言ひ傳へて居る通り願成就といふべきものであらう。斯ういふ工合に本當に之が願成就であるといふことを、親鸞は至心廻向の四文字を通じて初めて見出すことに依つて彼は本願成就を知り得た。それに依つて彼は『教行信證』信卷といふものを書いたのでありませう。それ故に「諸有衆生其名號を聞き信心歡喜せんこと乃至一念せん」、即ち茲が信の一念、唯信する如來の本願成就の故に我等は唯信する、一つの本願の大利を唯信するのである、大利の本願を信する一つであります。其大願大行に隨順し、隨順すれば其願生彼國といふことは如來の廻向せしめたまふ其願を須ゆることである。其本願を用ゆれば願生其儘が得生である。願生の時に即ち得生するといふことが言はれるのである。斯ういふ工合に前後の文字といふもの、即ち所謂信の一念、信する一つで救はれるといふ問題が現生正定聚の利益、さういふことが總てこの本願成就の故に、至心廻向成就の故に、總て解決せられることであるとお讀みになつた。自分が斯ういふことを考へ出した時に烏滸がましいことでありますけれども偉い教へを受けたと申すより他はないのであります。題目へ入らないで斯ういふ工合に色々話をすれば切りがないことでありますけれども、天親菩薩は安心と教相といふものを明らかにしていこう。教相とは何ぞや、教相といふのはつまり法からして機

に向つて動いて來る所の働きをいふのである。安心とは何ぞや、安心といふのは機を以て法をおさめてゆく方向が安心である。まあさういふても烏滸がましいことになるかも知れませぬけれども、惡るければそれだけは取消します。けれども分らぬからさうしておきます。でまあ斯うしておきまして一體この願生とは何ぞや、一つ之からして決めていかんければならぬ。淨土論といふものを通じて我々が茲に感じますことは、つまり二十九種莊嚴といふものゝ原理は願生であるといふこと、願生問題を解決せんがために二十九種莊嚴といふものを開かれたのであるからして、それを逆に考へて來るといふと二十九種莊嚴、淨土莊嚴の原理は願生安樂國の一句である。斯う言はんければなりません。簡単に結論を急ぐとさういふことになります。然るに願生とは何ぞや、この願生といふことはつまり第十八願成就の願生彼國といふことで彼の國に生れんと願する、斯う書いてある。願生といふは信を裏付ける所の、信の背景となる所の信の原理だ、所謂宗教的先驗原理であります。斯ういふ風に言ふべきものでありませう。さういふことを明らかにされてこの願成就の文の願生彼國といふことは之を第十八願に移してみると欲生我國であります。阿彌陀佛の方から言へば我國に生れんと欲へ、それを教へる所の師匠の釋迦の言葉から言へば彼の國に生れんと願せよ、釋迦は彼の國といひ阿彌陀は我國といふ。即ち願生は欲生であるといふことは明らかであります。所が欲生とは何ぞや、親鸞は『教行信證』信卷の三心釋の中に欲生といふものを解釋しまして、欲生とは如來

が諸有の衆生を招喚したまふ教勅なりといふ言葉がある。信に依つて成立すべき信の先驗豫定、信成立のために前提さるべき所の願生、即ち如來が諸有の衆生を招喚したまふ所の教勅といふことになる。如來が諸有の衆生を招喚したまふといふことは我等衆生の言葉から言へば、我々が如來に喚ばれるといふことであり、召すのである。如來が大自覺であるといふならば我等衆生が如來によれば、如來に召されて居るといふさういふことを感得するといふこと、それは即ち我等が宗教的に目覺めるといふことであらう。我等が宗教的に自覺するといふことは如來に召されるといふことである。如來が衆生を召すといふことは如來即ち宗教的大自覺そのもの、内的に正しく自覺せんとする動機を言ひ現したものの、それが欲生といふことであります。我等眞宗學徒は口を開けば信の一念といふ。信の一念とは何ぞや、信の一念はこの欲生の欲の字が信の一念であります。欲といふ一字が信の一念を現すことは、須く『歎異鈔』を開いてその第一節を誦すべきであります。

彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとぐるなりと信じて、念佛まうさんとおもひたつこゝろのおこるとき云々。

「おもひたつこゝろ」といふことは、欲し起つ意、欲ひおこす、「たつ」といふても立つことではありませぬ。「起つ」といふこと、念佛まうさんと欲いおこす意の起きる、それが信の一念である。この信の一念を語る時にはおもひおこす、おもひ起つといふ言葉であります。又この『歎異鈔』の言葉を

思ひ出すならば、同時に必ずその最終の節にある次の御言を思念せずに居られぬ筈であります。

彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。

如來が助けやうとおぼしめし起つ、之が即ち如來の本願の動機を示したのである。之が所謂信の一念の原理である。念佛まうさんとおもひたつ意こそ我等がうけとる所の信の一念の内容である。如來の本願にふれる所の信の一念である。又たすけんとおぼしめしたつ本願と言へば即ち如來の因位の願心が衆生を喚び、如來の果位の光明が衆生を攝取して如來としての大自覺の端的を示す所のものである。それ故に欲生の欲の字、欲生といふそれが信の一念の端的を示す動機である。之は疑ふべからざることであります。之を詳しく申せば之だけ話しても盡きる所は無いであります。けれども之だけ言へば賢明なる諸君はそこだとお分りになるだらうと思ひますから詳しいことは止めます。

兎も角欲生といひ、願生といふ、之がつまり我々の宗教的自覺、宗教的原理の働く所の一つの點である。所謂信の一念、願生する所の信の一念といふものがある。願生が無いならば信の内的動機としてのその一念がない、只お助け下さい、有難うございます、さういふ生溫いものは一念が無いのであります。この願生といふ、欲生といふ、願といひ、欲といふ、そこに「たすけん

おぼしめしたつ」といふ如來の一念、それに信順する「たすけたまへと思ひ立つ」所の我等の一念、我等の一念と如來の一念とが本來一つである所に、そこに信心といふものがなり立つのでありませう。そこにつまり欲生の一念が同時に得生の一念であり、前念命終後念即生と言はれる所があるであらうと思はれる。で願生といふのは宗教的に自覺することだ。純粹宗教的原理に目覺めることである。宗教的原理それ自身から言へば宗教的原理それ自身が初めて動きかけることである。本當に動き出すことである。其宗教的原理が動き出した其初一念を象徵化したものが法藏菩薩と言はれる。法藏菩薩とは如來願生の端的を象徵化したものである、法藏菩薩は純眞なる所の欲生心の象徵化したものである。さういふことを言へば常識的眞宗學は壞れるかも知れませぬ。この位のことで壞れる常識の眞宗學は止めた方がよい。で法藏菩薩といふ正體は純眞なる所の如來の欲生心、如來の廻向心、之が法藏菩薩である。斯ういふ工合に言ひたいのであります。又言ひ得ると信じて居ります。其法藏菩薩が四十八願莊嚴淨土の行を選擇攝取した——莊嚴淨土の自覺の行といふものを選択攝取した——この選擇攝取する所の主觀の標準は何だ、標準的主觀は何である、それが即ち選擇本願といひ、願生淨土欲生我國といふ。本願三心——至心信樂欲生の三心の第三なる欲生の欲の一字が即ち選擇淨土の原理であり選擇願心そのものである。今簡單に説明する所に依つてさういふ工合に考へられる。大無量壽經によつて見るといふと彼れは御師匠世自在王如來のみに於て二百一十億の

諸佛の刹土天人の善惡、國土の麤妙を觀てさうして五劫にこれと思惟して選擇攝取して麤なるものを捨て妙なるものを取り、善なるものを取つて惡なるものを捨て四十八願の内容といふものを選擇攝取決定した、斯ういふ工合に書いてある。それは何が選擇攝取であるか、何を標準に攝取したものであるか、善いものを取つて惡いものを去り妙なるものを取つて麤なるものを捨てた。その麤妙の標準如何、善惡の標準如何、其標準は何所にあるか、即ち欲生の心、それが選擇の標準である。選擇攝取の原理そのものである。つまり信の原理たる願生に目覺めて願といふものゝ内容それは「生」即純粹なる「眞生」を明らかに自證して行くその内容が、淨土の莊嚴といふことである。さうして願生の願の内容を明らかに自證して行くといふことがそれがつまり莊嚴淨土の行の觀察といふものである。斯ういふことは疑ふべからざることかと思ふのであります。時間も豫定がありますから問題は餘り進みませんけれども一つ二つだけをお話していかうと思ひます。

二十九種莊嚴の中で佛莊嚴、菩薩莊嚴の方は略しておきまして、主として茲に國土の十七種莊嚴といふものが一番重要なものに茲になつて居ると思ひます。莊嚴淨土と云へばそれが主なるものであるといふことになるであらう。併し佛莊嚴の中に不虛作住持功德莊嚴といふのはそれは又一段重要なものであります。けれどもそれは又別の意味であるとして略しまして國土莊嚴十七種の中の或る二三のものだけをお話して見たいと思ひます。

國土莊嚴が十七通りある。其中の初めに清淨功德といふものがある。之が總相、總句といひまして國土莊嚴の中の總體である、全體の莊嚴である。其清淨功德の内容を書いてそれに後の十六通りの莊嚴をひつくるめます。即ち之が淨土の賓辭でありますからつまり範疇、淨土の範疇といふものであらうと思ひます。十七通りの範疇といふものであらうと思ひます。で其清淨といふのは現代語から云へば、純粹と云ふことで、經驗といふものに對して純粹は先驗的とかいつて居りますがつまり純粹をば清淨といふことでありませう。美とか何とかいふことでない、純粹といふことであります。個人的經驗、さういふ不純粹な經驗でない、純粹經驗といふものであらうと思ひます。其清淨句といふのは何であるか、親鸞の言葉で言へば、「安養淨土の莊嚴は唯佛與佛の知見なり、佛と佛との知ろしめす所である。つまり大無量壽經の言葉を借りて言へば佛佛相念であらうと思ひます。佛と佛と互ひに相念するといふことは能念所念共に佛であり能所平等一如である。故に佛が本より佛である。法界の萬象は相互に内外無碍にして平等に無限絶對の大寂定の靈光に輝くといふことより他何ものもない。萬象が自らの本義に満足し、其満足するといふことが即ち佛々相念することである。總ての諸法は本性平等であるが故に自分自身の本義に満足することは即ち佛々相念するといふことである。即ちこの無限絶對の宗教的真理、宗教的法性ともいふべきことは佛々相念の大寂定といふべきものである。それが宗教的總相といふものである。彼の世界の相を觀するに三界の道に勝過す

る、其佛々相念の境地を清淨句といふので言ひ現したのである。さうして淨土の全體的すがたは清淨純粹といふことである。それはつまり我々の個人的穢れた自力の計らひを超えて佛と佛との知見である。之が總句である。其總句の純粹經驗の内容を對象化してそれを内に限定したものが次の十六の別相と言はれるものであらうと思ふ。其十六句の中の第一量功德を説いてある所に「究竟せること虚空にして廣大にして邊際無し」、さうすると大無量壽經にはこゝを去ること十萬億土にして極樂といふ。阿彌陀經にもさうある。然るに何事ぞや、世親は大無量壽經の教へに反いて居るのでないか、大無量壽經の教へを知らざるものゝ如くにして彼は「究竟して虚空の如く廣大にして邊際なし」それは何故ならば、大無量壽經に曰く、「所修佛國、恢廓廣大、超勝獨妙、建立常然、無衰無變」彼れはこれに依つて居るが故に、併し經文に前後矛盾するは如何、之がつまり教相と安心、教相と存して教といふものに逆かずして安心を明らかにしたものであらう。斯の如く考へられなければならないと思ひます。淨土は西方にある。然るに淨土は廣大無邊際である。廣大無邊際とは何ぞや、徒に空間的に大きなことだと思つて居ります。そんなことぢやない。究竟して虚空の如く廣大にして邊際なしといふのは、之は私は教行信證の眞實の證を明らかにしたものである。斯の如く信する、つまり淨土の眞證、信の對象として其教へを仰ぐ時には何所迄もそこに釋迦がやるせなき所の方便を以て、所謂太陽崇拜といふやうな形に準じて彼は西方十萬億の西に於て極樂淨土を建設したま

ふたとしるされてある。其深いお思召には如何なる深きおぼしめしがあるか、それは今茲で述べるまでも無いことであらうと思ひます。然るにそれが信の對象として所信の境として言へば、教へ其ものを通じてつまり往生淨土の教は西方十萬億土である。教へを通じてそこに證得する所の眞實證の境地をあげるならばそれは何であるか、それは究竟して虚空の如く廣大にして邊際なし、眞實證即ち證大涅槃の境といふものをあげまして究竟せること虚空の如く廣大にして邊際なしと言はれたのである。斯ういふ工合に思ひます。其次に性功德、第三番目の性功德といふのは偈文の言葉を借りて見るといふと「正道の大慈悲は出世の善根より生ず」、正道の大慈悲それは即ち出世善の根本なる正道の大慈悲よりして如來の淨土は出生して建立せらる。之には色々の解釋が曇鸞の論註の中に記されてありますけれども、それを一々申すことは出来ない。之はつまり淨土建立の因といひますか、淨土の本性を明らかにしそれで淨土建立の因を明らかにしたのである。所が之を祖師親鸞はこの性功德の中に曇鸞が四種の平等淨土の生因として、その原理として四平等性といふものがあります。諸法平等なるが故に發心等し、發心等しきが故に道等し、道等しきが故に大慈悲等し、大慈悲は是佛道の正因なるが故に。

斯ういふ言葉がある。之を今詳しく申すことは私には出来ない。且つ解釋する暇もないから止めておきますが之が法藏菩薩の内面、法藏菩薩の淨土莊嚴の因といふものを明らかにする所の論理道

程、さういふものを明らかにするのがこの四平等といふものである。斯ういふことだけを申しておきます。所が親鸞は四平等の中の第一に「諸法平等」といふ言葉を如來の「願海平等」、諸法といふことを願海に變へて「願海平等の故に發心等し、發心等しきが故に道等し、道等しきが故に大慈悲等し、大慈悲は佛道の正因なるが故に」、諸法平等の諸法を願海といふ字に變へてこの四平等といふものを以て信卷の信といふものゝ本性を明らかにするために用ひられた。之は、非常に面白いことである。面白いといつては悪いけれども之は非常に注意すべきことではないかと思ひます。私は茲に眼を着けてみるといふとこの姓功德「正道の大慈悲は出世の善根より生ず」といふのはつまり淨土は何の因に依つて、何の本性に依つて生じたか、淨土の因を求むれば出世無漏清淨の善根なる所の正道の大慈悲からして淨土といふものが生じたのである。淨土を能生する所の因といふものをそこに明らかにするのがこの性功德の言葉である。所が親鸞が之を轉用された所の精神からみますといふと之は淨土へ往生すべき所の正因たる信心佛性、信心佛因を明らかにするものがこの性功德である。斯ういふ工合に親鸞が讀まれた。之は私非常に重大性を有つて居る。非常に深い意味を有つて居るのではないか、唯一寸隨宜轉用して一寸面白く應用されたのである。一時借用といふことでなくて、それは親鸞としてはさう見なければならん所の必然の道理があると見なければならんと思ふ。我等が本當に淨土へ往生すべき因といふものと如來が淨土を建立された所の因といふものと一つで

なければならぬ。それが一つである所に眞實報土といふものが成立する。それが一つである所に眞實報土といふものに往生出来るのである。如來が眞實報土を建立された所の其因を了知することを信心といふのであらう。如來が眞實報土を莊嚴せられる所の其莊嚴の因といふものを求むれば無緣大慈悲心といふものに到達する。正道の大慈悲心、然らば其淨土へ本當の眞實報土に往生すべき所の眞實の正因は正道の大慈悲でなければならぬ。茲に眼を着けて親鸞のこの指圖といふものに依つてみるといふと、性功德といふものは之は眞實信といふものゝ原理を明らかにしたものである。斯ういふ風に言はんければならぬ。斯ういふことも今詳しく申すことは出来ません。眞實信心は如來満足大悲の信心海である。つまり信心とは何ぞや、如來大慈悲心である。大慈悲とは何ぞや、大いにはれむ心である。大いにはれむとは何ぞや、大いに悲しむ心である。あはれむといふことは悲しむといふことに依つて本當に成立するのであらう。自分は樂天的になつて人だけあはれむといふことはない。本當にあはれむといふことは自分が本當に苦勞し抜いて初めにあはれむといふことである。現在自分が苦勞し抜いて居る所にあはれむといふ働きがあるであらう。つまり大いにはれむといふことは大いに悲しむことである。斯ういふ風に言はなければならぬ。慈悲の悲といふことはあはれむといふことであるがあはれむといふ文字は悲しむといふことより來たものであらう。斯ういふ工合に考へらるべきものであらうと思ひます。即ち正道の大慈悲を二種深信に移してみれば機

の深信は大いに悲しむことである。法の深信は大いにあはれむことである。あはれむと悲しむとは一つであるが故に二種深信一つの深信である、斯くの如く觀することが出来るであらう。つまり如來の本當の大慈悲心に徹底すればそれが即ち眞實信樂といふものである。斯ういふ風に言はなければならぬ。之は只今説明する餘地が無いから是だけのことを申しておきます。眞實信の廻向の内面、眞實信の内面を開いて正道の大慈悲は出世の善根より生ず、淨土を建立する因を明らかにしたのであるが、それと同時に淨土へ往生すべき所の淨土往生の正因を明らかにするものである。信心の原理を明らかにするものである。是れ往生即成佛の自證である。斯ういふ工合に申すことが出来るでありませう。

それから其次は淨光明満足して鏡日月輪の如し。之は形相功德、莊嚴とは象徵化、具體化であるといふお淨土の形は一體どんな形であるか、華嚴經を見るといふと、諸佛の淨土には色々の形がある。鞠のやうな形もあれば或は又覺えて居りませんけれども無量雜多の形がある。阿彌陀の淨土はどういふ形であるか、鏡輪の如く日輪の如く月輪の如し。日輪は圓いものだが月輪は圓くないこともある。但し月の體は圓い、月輪とは満月をいふのであります。輪といふことは車輪でありますからやはり圓滿なる所をいふのであります。之は何である、之はつまり教行信證の大成を現したものである。これだけを申しておきます。大行圓滿、この大行の圓滿を説いたのであります。南無阿彌陀佛の六字の名號の中に因位の萬行果地の萬德悉く攝在して自然法爾に令諸衆生功德成就と我等に

廻向せしめられる。南無阿彌陀佛と一聲稱へる自ら萬善萬行恒砂の功德が圓滿に衆生に満足する。一念これを行する所に因位の萬行果地の萬德悉く満足するといふ所がこの淨光明満足、鏡日月輪の如しといふ。此れ信一念の自證の内容であり、信成就の光景である。即ち純粹の行といふものを明らかにするものがこの形相功德といふものでないかと思ひます。

更に其次に種々事功德——色々の事柄の功德、——諸の珍寶性を備へ妙莊嚴を具足す。

之は私は眞實教を明らかにして、つまり大無量壽經の一字一句は生ける佛の應身化身の相である。日蓮上人は法華の一字一句は皆佛である。然らばこの大無量壽經の一字一句は十方諸佛である。——十方恒砂の諸佛である。十方恒砂の諸佛が我名を稱揚讃嘆するといつた其十方恒砂の諸佛とは何ぞや、大無量壽經の一字一句があるがまゝに能證能讚の十方恒砂の諸佛であります。諸の珍寶性を備へ妙莊嚴を具足する、之も今文字を説明する餘暇はありません。けれどもそれは眞實の教を讃嘆したものであるります。次に

無垢の光炎熾んにして明淨にして世間を曜らす。

之は妙色功德、微妙なる色の功德である。之は前の四つを結んで無垢の光炎熾んにして世間を曜らす。世間とは何ぞや、佛莊嚴國土莊嚴といふものである。救ひを求めて居る者は娑婆世界の我等である。我等の娑婆の依報正報の二つある。迷ひの娑婆の國土と、清淨である救はれた所の姿から

言へば世間と云へば即ち淨土の國土、衆生は佛菩薩である。二十九種莊嚴は依報正報、國土世間と衆生世間の二つがある。斯ういふ工合に解釋して居ります。外なる所の世間、内なる所の世間、内なる世間は淨土であり、外なる世間はこの迷うて居る所の現實の世間である。外なる世間に型とつて内なる世間を莊嚴したのであらう。さうして外なる世間といふものを内なる世間に攝取するであらう。斯ういふやうな内外の關係といふものも今茲にお話することは出来ない。けれども淨土莊嚴の一例としまして茲に十七種の中の二三をお話した次第であります。淨土莊嚴の原理といふも願生といふ本願の働きであり、欲生心も本願の働きである。然らば本願の體は何ぞや、本願の體は至心である。至心はつまり純粹な宗教的原理、即ち法性法身である。欲生は何ぞや、純粹宗教的原理の働かけける所の方便法身である。方便の法身を成就する所の方便の原理である。斯ういふ工合に方便法身が成就した所に宗教といふものが成立するのである。さういふ工合に言はれるだらうと思ひます。兎も角欲生心は如來が諸有の衆生を招喚する所の教勅である。如來の本願に目覺めること、根本的には如來が自身に目覺めること、如來の目覺といふことはまた如來自身に目覺めたことである。如來が如來自身に目覺めるといふことがそれが即ち我等が如來に目覺める所の根本であらうと思ひます。それが即ち淨土莊嚴の原理といふものであります。

最後に淨土といふものは即ち如實なる物質界、純粹の感覺世界といふことであらうと思ひます。

所謂純粹なる所の法性、純粹なる形なき佛の自證としての願作佛心其ものは純粹宗教的原理でありませう。願作佛心は何であるか、佛が佛自身になりたい、佛が佛自身でありたいといふのが願作佛心である。法性法身たる所の願作佛心であらう。其願作佛心が度衆生心として佛が佛自らに本當に目覺めるに就いては、佛が衆生を目覺めしめるといふことが佛が佛自ら目覺める所の方法である。徒らに佛が佛自身目覺めるといふことは無い。佛が本當に佛自身の本質に目覺めるといふことは衆生を佛にしよう、衆生を佛の本性に目覺めしめるといふことである。然り而して衆生を佛の本性に目覺めしめるといふ純粹なる度衆生心は衆生を招喚するといふ所の願生心、衆生本然の願に目覺める欲生心といふものであらう。そこでそれが宗教原理の働きであります。宗教原理の働きとは何ぞや、法性法身が方便法身といふものを生ずる所の、即ち色形を超越して居る所の法性法身が色形の現れる所の方便法身といふものを造り出す所の其原理、それがこの欲生心といふものであらう。それ故に我等は欲生心といふものは其如來の方便法身を通じて如來の法性法身に導入するといふこと、之が即ち願生心といふものゝ重要な使命である。斯ういふ工合に考へるのであります。大體のことは殆ど分るやうにお話することは出来なかつたかも知りませんが、併乍ら自分の言はうとして居ることは略々賢明なる諸君はお察しであると思ひます。

本論文は昨秋開催の大谷學會公開講演の筆記でありますが、一應先生に御校閲を願つたものであります。